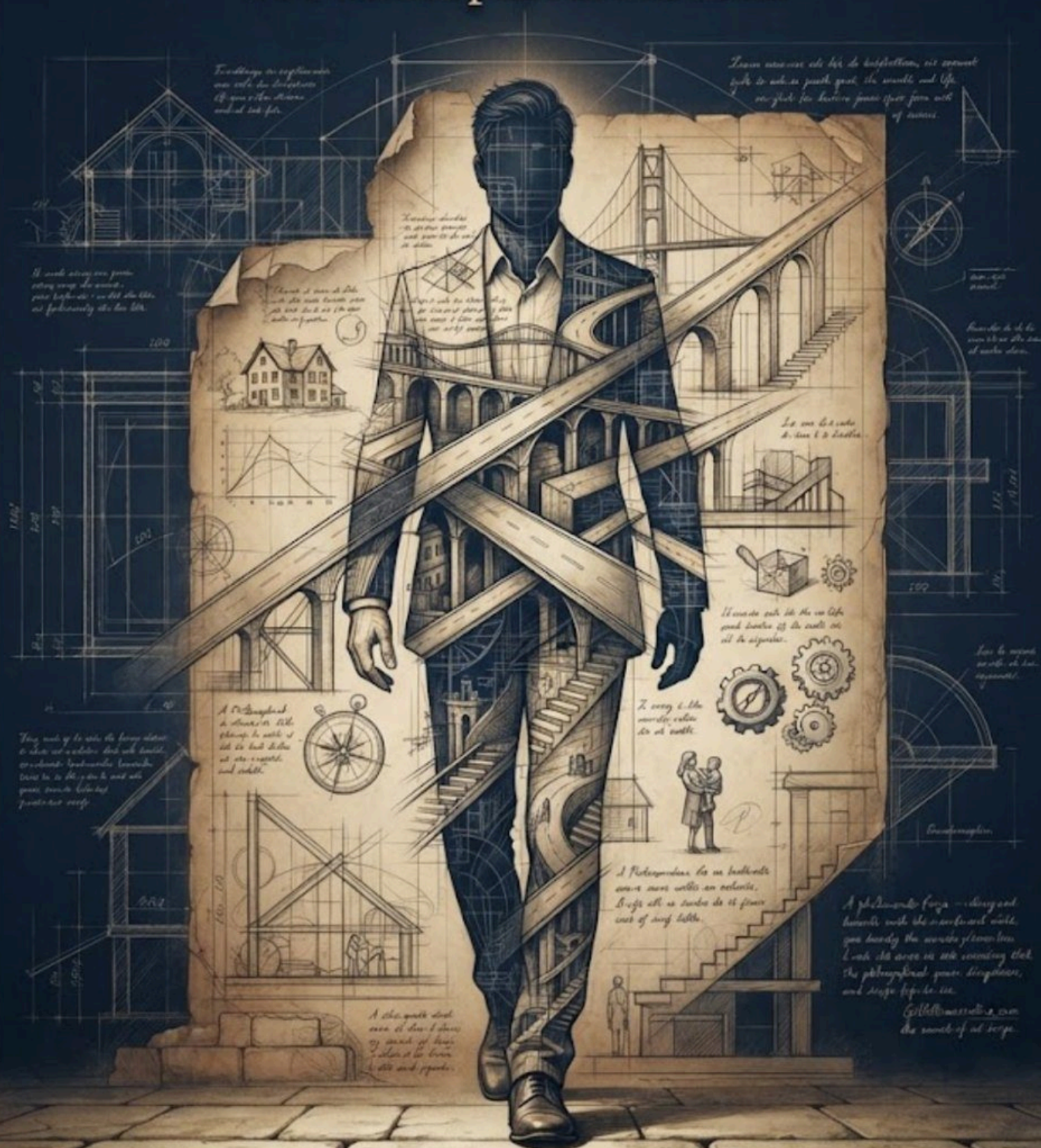


Ferdinando Frega – Nando the Scribe

LIFE IS A PROJECT

A Philosophical Memoir



FUNDAMENTA

Gillettenarrative.com

人生はGilletteのプロジェクト

Gillette Audio — 書記ナンド — gillettenarrative.com

建築と社会工学には一つの決まりがある。何を建てようとするにせよ、出発点となる土台がなければ、プロジェクトはけっして定まらない。

人生は私たちの最大の建築だ。そして私たち自身がそのプロジェクトである—不完全さを、人が到達しうる最高の尺度として追い求める工学のなかの。

今日、気がつくとりハビリテーション病院のなかにいた。病人が大勢いた。自然な動きを奪った病に襲われた人たちだ。そして、なぜ自分がそこにいるのか、すぐにわかった。

私は選ばれたのだ。人間の苦難を理解し、それを書きとめるために—病人にできないことが一つあるとすれば、それは、自分がどれほど、なぜ苦しんでいるのかを、いくらかでも正確に言うことだからだ。

苦しみとは、当たり前動作を取り上げられることだ。ある日、あっさり取り消される。説明はない。人生がひとつの病を呑みこむ。だが代価が前もって明かされることはけっしてない。

知っている病人に出会った。一人。二人。三人。四人。そして自分がひとつの授業のなかにいるのだとわかった。だが、何の授業だ？

私は心が若いまま、ほかの人たちが向こう側へ渡る支度をしているのを見つめていた。なぜだ？ 何を理解しろというのか？

帰りの車中は荒れた—ともに過ごした時間の記憶が幾重にも重なって。誰もがナンドをあだ名で覚えていた。撃つ前に的を宣言し—仕留めて壁に掛ける男。とんでもないことを口にして、そのとおりにやってのけた男。毎回、必ず。空想のままで終わったものは何ひとつなかった。

娘は、私が老いぼれていくのを見たら精神病院に閉じこめてやると言った。私の答えは単純だった。女だらけのところを探してくれと頼んだのだ。私がくつろげる場所は、そこしかない。

私たち男は、女から生まれた。そしてたいいの男は、できることなら戻っていただろう。それは変えようがなかった。見まがいようもなかった。そして病とは、私はここにいた、と言うための通過点にすぎない。

結局、残った読み方は一つだけだった。

ああ、たしかに彼を知っていた。あなたが思っていたような男ではなかった。ナンドだった—Gilletteの、あのナンド。

ナンド